

# 万引対策百般

## TOKYO立(だ)ち その7

### 4月5日の公共放送から報道の重要さ・難しさを学ぶ



#### NPO法人 全国万引犯罪防止機構

4月中旬、春の風は遠雷を呼び寄せ、散りゆく花を高く舞い上がらせていた。今回の国際会議では広報も重要視していた。この会議に参加したくてもできなかった方が多数いる。さらにはそんな会議があるのなら、参加したかった方。参加しなくても会議の情報が必要としている方が多数いる。まだ見ぬそれらの方々に伝えるため報道は欠かせない。

2月23日の週刊新潮では『インテリが人権侵害とのたまう「万引き画像」公開』という題で、元検事である川口克巳弁護士の名譽毀損は、それが専ら公益性を図る目的であった場合は免責されることの見解を示し、「多額の被害からの回復を図ることは、社会秩序を守るの一環として捉えることもできる。公益性があると解釈する余地がある」と説明された。さらには、評論家の呉智英氏も「万引の被害者が救済されないという現実がある。それを補おうとする店主の自衛行為を『私刑』と批判する人は、イ

デオロギーを守ることが最優先。現実には盲目的な余り、目の前の現実がその矛盾を衝いていることに気づかないのです。まさに『デオロギーファースト』で、被害者のことなど眼中にないのです」と意見されていた。

その最中、NHKのクローズアップ現代プラスより、「高解像度データ社会(仮)」という題で、万引対策強化国際会議2017の講演・討議風景の撮影、さらには質問として、Qアメリカで成果の上がった万引対策は？

Qなぜ違う会社同士の情報共有を可能にできたか？ Q日本の万引対策の現状をどう思うか？

を取材してほしい。できれば、米国登壇者の店舗視察の様子もお願いしたいという依頼があった。当機構としては最大限の取材協力をし、4月5日に放送された。

しかしながら、番組では「テロ対策ならまだしも、たかが万引き」とき

で顔認証システムはオーパスベックだ。防犯データーの共有は危険では？という見解が色濃く反映されるものになった。取材協力したショッピンクセンターの担当者

は「個人情報観点から一方的な報道されるなら取材はお断りする。一方的な報道ではなく防犯対策に寄与できるのであれば協力する」としていた。私は、今回の報道では、店舗側の被害状況や心情といった側面があまり伝わりにくかったように感じた。

しかし、私はこの担当ディレクターは信用できない方だと思っている。なぜなら取材を終えた3月10日の晩に「会場で様々な方のお話を伺って、万引きの主体が個人から集団組織化し悪質化している、対抗手段を講じなければいけない」という切実感が非常に伝わってきた。

またデータベース構想を進めるには、内容を社

会にオープンにして理解を醸成していくべきだという竹花理事長の姿勢も共感しました」というお札のメールを頂戴したからだ。社会全体として、小売業の万引被害の重大性を知っている人は少ない。多くの場合(たかが)万引きくらいで…という判断をされることがある。結局は今もそのような表現につながったのではない。竹花理事長は、関連して「こういう判断は、多くの組織にも言えることだ。かつて維新のリーダーたちは、自ら欧米視察をして最新の情報と未来のグランドデザインを持っていた。今幹部は部下をリードするだけの情報を持っていないことが多い」と話されていた。

報道各社へお願いとして、各方面で新たな対策が必要になったとき、その危険性だけを流し、国民を不安に陥れることに終始するのではなく、現実(現場の被害状況)

を見て、その対策が必要なる理由を伝え、②その対策のデメリットとその克服策を示し、③その克服策が現状どのような形で進められているのかを明らかにして欲しい。

この番組のラストは「新しい技術には、必ず光と影の部分がある。顔認識カメラに関しても技術をいかに賢く使えるのか、教育も含めて議論が必要で終わっているが、その議論についての内容は皆無だった。アナウンサーの武田氏が「すっきりしない」と番組の後半で連発されていた。最近の報道は、未記名のネット書き込みで左右され、実名での直接対話や対策迄の調査報道を疎かにしている。だから実態が掴めない。武田氏の言葉がそれを言い表しているように見えた。

今回の改正個人情報保護法に関して言えば、当機構でも盗難情報データーの安全利用の協議を進めている。そのよう

な動きを報道せず、危険デオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストのドグマに陥る怖さを学んだ。

しかし、さらに怖いのは我々がドグマに陥ることだ。そうならないようにと河上和雄前理事長(故人)は、平成24年の東京万引き防止官民合同会議の寄稿文集の中で、次の戒めを残した。残念ながらこの会議の情報が末端組織や売場のスタッフまで届いていない状況があります。関係者が本気で臨まない改善は進めるが？

例えば、確かに誤登録の可能性を考慮する必要がある。誤登録は、システムに登録される者の不利益はもちろん、システムを運営・登録する側も、無用なトラブルを生じさせるだけなので、絶対に避

けたいことである。救済手段として第三者機関的なものを立ち上げ、市民の相談窓口を作り、登録内容の正確性を保証する制度を作るべき。そうした枠組みを構築できれば、不当なプライバシー侵害を防ぐことは可能である。

Q「テロ対策なら分かるが小売店で客の画像を撮ることは慎重であるべき」との意見もあるが、どう考える？

例えば、小売店の万引き被害は深刻で、その日の利益が万引きの被害で吹き飛ぶこともある。常習犯や組織的犯罪への対抗策は必要。一定以上の被害を出した悪質な万引き犯・窃盗犯に限定するなどの条件をつけたうえで、企業の枠を超えた防犯データーの共有を進めるべき。

Q2)ただ、誤って登録され、どの店に行っても警備員に疑われるという事態が起るリスクがあるか？

例えば、確かに誤登録の可能性を考慮する必要がある。誤登録は、システムに登録される者の不利益はもちろん、システムを運営・登録する側も、無用なトラブルを生じさせるだけなので、絶対に避

けたいことである。救済手段として第三者機関的なものを立ち上げ、市民の相談窓口を作り、登録内容の正確性を保証する制度を作るべき。そうした枠組みを構築できれば、不当なプライバシー侵害を防ぐことは可能である。

全国万引犯罪防止機構(通称・マンボウ)万引撲滅のための戦略を本気で提言・実践する小売業界を中心に組織化されたNPO法人

文・事務局(稲本義範)

4月中旬、春の風は遠雷を呼び寄せ、散りゆく花を高く舞い上がらせていた。今回の国際会議では広報も重要視していた。この会議に参加したくてもできなかった方が多数いる。さらにはそんな会議があるのなら、参加したかった方。参加しなくても会議の情報が必要としている方が多数いる。まだ見ぬそれらの方々に伝えるため報道は欠かせない。

2月23日の週刊新潮では『インテリが人権侵害とのたまう「万引き画像」公開』という題で、元検事である川口克巳弁護士の名譽毀損は、それが専ら公益性を図る目的であった場合は免責されることの見解を示し、「多額の被害からの回復を図ることは、社会秩序を守るの一環として捉えることもできる。公益性があると解釈する余地がある」と説明された。さらには、評論家の呉智英氏も「万引の被害者が救済されないという現実がある。それを補おうとする店主の自衛行為を『私刑』と批判する人は、イ

デオロギーを守ることが最優先。現実には盲目的な余り、目の前の現実がその矛盾を衝いていることに気づかないのです。まさに『デオロギーファースト』で、被害者のことなど眼中にないのです」と意見されていた。

その最中、NHKのクローズアップ現代プラスより、「高解像度データ社会(仮)」という題で、万引対策強化国際会議2017の講演・討議風景の撮影、さらには質問として、Qアメリカで成果の上がった万引対策は？

Qなぜ違う会社同士の情報共有を可能にできたか？ Q日本の万引対策の現状をどう思うか？

を取材してほしい。できれば、米国登壇者の店舗視察の様子もお願いしたいという依頼があった。当機構としては最大限の取材協力をし、4月5日に放送された。

しかしながら、番組では「テロ対策ならまだしも、たかが万引き」とき

で顔認証システムはオーパスベックだ。防犯データーの共有は危険では？という見解が色濃く反映されるものになった。取材協力したショッピンクセンターの担当者

は「個人情報観点から一方的な報道されるなら取材はお断りする。一方的な報道ではなく防犯対策に寄与できるのであれば協力する」としていた。私は、今回の報道では、店舗側の被害状況や心情といった側面があまり伝わりにくかったように感じた。

しかし、私はこの担当ディレクターは信用できない方だと思

っている。なぜなら取材を終えた3月10日の晩に「会場で様々な方のお話を伺って、万引きの主体が個人から集団組織化し悪質化している、対抗手段を講じなければいけない」という切実感が非常に伝わってきた。

またデータベース構想を進めるには、内容を社

会にオープンにして理解を醸成していくべきだという竹花理事長の姿勢も共感しました」というお札のメールを頂戴したからだ。社会全体として、小売業の万引被害の重大性を知っている人は少ない。多くの場合(たかが)万引きくらいで…という判断をされることがある。結局は今もそのような表現につながったのではない。竹花理事長は、関連して「こういう判断は、多くの組織にも言えることだ。かつて維新のリーダーたちは、自ら欧米視察をして最新の情報と未来のグランドデザインを持っていた。今幹部は部下をリードするだけの情報を持っていないことが多い」と話されていた。

報道各社へお願いとして、各方面で新たな対策が必要になったとき、その危険性だけを流し、国民を不安に陥れることに終始するのではなく、現実(現場の被害状況)

を見て、その対策が必要なる理由を伝え、②その対策のデメリットとその克服策を示し、③その克服策が現状どのような形で進められているのかを明らかにして欲しい。

この番組のラストは「新しい技術には、必ず光と影の部分がある。顔認識カメラに関しても技術をいかに賢く使えるのか、教育も含めて議論が必要で終わっているが、その議論についての内容は皆無だった。アナウンサーの武田氏が「すっきりしない」と番組の後半で連発されていた。最近の報道は、未記名のネット書き込みで左右され、実名での直接対話や対策迄の調査報道を疎かにしている。だから実態が掴めない。武田氏の言葉がそれを言い表しているように見えた。

今回の改正個人情報保護法に関して言えば、当機構でも盗難情報データーの安全利用の協議を進めている。そのよう

な動きを報道せず、危険デオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつてしまふ。そのよう

なことの無いように「まず自分自身を抛りどころにせよ」とし、教条主義を遠ざけた。最初に形式や法ありきではなく、まずは他者・自身との対話の中で真実を探索

することを重視した。今回の件を通じて、イデオロギーファーストの煽る報道をされると懸命に万引対策に取り組んでいる小売業の現場の意欲を削ぎ、さらには安全利用へのさまざまな動きをストップさせることになる。

古く仏典には教条主義に関する教えがある。フツタにはデーヴァフツタという弟子がいた。デーヴァフツタはフツタに「五事の戒律」を強く提案したがフツタはそれを拒否した。そのため彼は分派して新しい教団をつくったという。彼がフツタに提唱した「五事の戒律」は、古い仏教の修行者が尊んでいた苦行的な生活法であり、デーヴァフツタとしては民心を自分の方に引きつける材料にもなりうるものであった。一方のフツタは、自

ら灯明・法灯明(自らを灯とし、法を灯とせよ)にあるように、ただ、法に従うことにのみ忠実になつてしまつては法の奴隷になつ